

東京バッハ合唱団 月報

[第 607 号] 2013 年 1 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.607

January 2013

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

バッハと創造

山本 弘史 (内科医、山形県在住)

バッハを音楽史上の最高の作曲家とすることを、多くの人が認めている。その技法と音楽性を越える作曲家を私は知らないし、多くの人もそれに同意する。そのバッハの音楽は、創造の信仰に支えられたものであり、創造と不可分であり、神の偉大な創造を示しているものなのである。そのことを以下に述べたいと思う。

まず第一に、ダーウィンの「種の起源」が、1859年であるから、1750年に亡くなったバッハは、すべての人が、疑いなく神の創造を信じていた時代の人であり、当然、バッハも創世記を文字通り信じていたのである。そこに、確信に満ちた信仰の音楽が生まれる土壌があり、その信仰がバッハ個人の信仰告白の音楽に結実した。信仰のスタートが創造信仰であり、ゴールとしての主イエス・キリストを救い主として信じる信仰が、バッハの音楽から読み取れる。オルガンのための「お人よ、汝の大きな罪を嘆け」BWV622 や「愛しきイエスよ、我らはここに」BWV633 は、《オルガン小曲集》に含まれている素晴らしい作品であるが、これらはすべて個人的信仰告白に聞こえる。進化論的信仰に立つならば、誰でも自分が直接神に造られたのではなく、より近い存在として、猿や魚を思い描かなければならず、当然そこから生まれる音楽も変質するのである。バッハの音楽にも異質なものが入ってしまった可能性がある。しかし、創造信仰に支えられたバッハの音楽は、あくまでも純粹なのである。時代背景として、バッハの音楽は創造を基盤においていたと言える。

第二にバッハは、哲学者ライプニッツ (1646-1716) の考えに興味と共感を持っていたと言われており、「それは非常によかった」という創世記の記述 (1:31) 通り、この世の原理が、きわめて「よい」原理に基づいて造られているという信仰に立っていた。つまり、音の響きそれ自体が「よく」できているため、その「よい」原理を表現するという意図で音楽を作ったのである。この世が混沌としているという信仰とは正反対の信仰であり、当然生まれてくる音楽は、理性に 100% 満足を与える、完成された「よい」ものなのである。バッハは、何もない宇宙空間に音の建造物を建てることができた。それは、バッハが、音の世界を神が最良に造っているという信仰があったからなのである。オルガンの《トリオ・ソナタ》第 1 番などを聞くとその

調和は素晴らしく、人間の理性が、神の創造の原理を表現できるということがわかる。しかしそれは、創造の信仰あってはじめて可能になったことなのである。バッハの音楽は、いわば良く創造されたこの世の美しさを明らかにする労作であり、それは究極の宇宙観、哲学に到達し、宇宙の原理そのものを表現する境地に至っている。それは、《インヴェンション》や《平均律クラヴィーア曲集》にも見出され、それらは宇宙的視点に立っている。響きが、宇宙を埋め尽くすような表現として「我らキリストを讃えまつらん」BWV611 があげられ、神の宇宙全体の支配を表現している。旋律が、宇宙空間を駆け巡っているかのような表現は、やはりオルガン曲の「我らの救い主イエス・キリスト」BWV688 に聞くことができる。バッハの音楽に粗末なところがなく、すべてがよいのは、堅い創造信仰の上に立っているからだと思う。バッハの音楽は、自らの心の表現や新しい表現を主眼としたものではなく、素晴らしい創造の原理を明らかにしようという、明確な意図をもって作られている。

第三に、バッハの音楽を越えるものがないという事実が、創造の真理を示している。創造により、この世はどこまで追求しても本来は良くできているのであり、破たんはないのだから、(罪による影響をうけているも



の) 音楽も、すでに完成されたこの世の原理を越えて進化していくなどということはないのである。すなわち誰もバッハは越えられない。バッハを聞くと、それ以上のものはないと感じる。神の与えたこの世の原理を十全に表していると感じるのである。オクターブは 12 音で十分であり、20 世紀に微分音というさらに細かい音による音楽も書かれたが一般化はしなかった。それは、音楽が、神が人に与えた定められた感性と能力によるものであることと、よい音楽は、神が人に与えようとしてすでにその御手にあるとも考えられるからである。つまり音楽は完成しており、バッハはそこに到達したと考えられる。バッハは、神の造られた「よい世界」の姿を十全に表しているのである。

「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」(ローマ 1: 20)

2012 年 11 月 29 日

.....

■筆者・山本弘史(やまもと・ひろし)氏は、かつて朝日新聞全国版で紹介された記事(「日本語でバッハのカンタータ / 楽譜完結の記念演奏会」2006.5.6 夕刊)をご覧になって、山形より公演チケット(同年 5.13)をお申込みになり、後に「バッハの日本語演奏は、全く違和感がなかった」という感想をお寄せくださったのが初めです。その後、地元のお仲間方と当出版局発行の楽譜を使って、カンタータ 140 番《目覚めよと呼ばる ものみの声高し》第 1 曲の練習をお始めになり、今夏に披露のご予定とか。長年、山形県東根市にて内科医院を開業なさっています。このたびは、編集部よりの依頼にお応えくださり、ご寄稿くださいました。

なお、本年 3 月の当合唱団《マタイ受難曲》にもご参加くださるそうで、年明けから土曜日の練習に出席されます。これで遠隔地からの参加者が、釧路の須藤富美さん(S)につづき、お二人目になりました。バッハ音楽の引力、「創造」の力、かくや、です。

2012 年を振り返る

「東京バッハ合唱団創立 50 周年」を
祝う一年



加藤 剛男 (団員・バス)

東京バッハ合唱団の 2012 年は、年間を通し、創立 50 周年を祝う画期的な一年でした。その足跡を振り返ってみたいと思います。

① 大村恵美子先生、東日本大震災の地を訪問

2012 年 1 月 7 日(金)～1 月 9 日(日)。新年になって直ぐに大村先生は大震災の地仙台、そして 6 月には郡山を訪問されました。前年 12 月の定期演奏会を含む諸活動の中で、福島の子どもたちを守る 300 名の署名と 10 万円、7 万円の支援金を集められ、それらを携えられて被災地へ向かわれました。帰京されてから先生

は「3・11 のダメージは、私たちが今後、一生償っても終わりません。孫子の代までかかって日本を立て直すのです」と語られました。

② 荻窪教会で公開レクチャー

3 月 3 日(土) 14:00～15:00、荻窪教会。公開レクチャー「バッハの受難曲と福音書」。講師：荻窪教会牧師小海基氏(テノール団員)。マタイ、ヨハネ両福音書では、キリスト受難の記事が、同じ出来事をあつかいながら、視点も文体も微妙に異なっています。小海氏は、それぞれの特徴と、バッハはそれらをどのように各受難曲で展開したかを語られました。マタイでは「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」(ヘブライ語で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」の意)ですが、ヨハネではイエスの言葉はなく、「成し遂げられた」とだけ記されている、など。

③ 特別演奏会「《マタイ受難曲》、入門の入門」

5 月 19 日(土) 14:00、荻窪教会。団員の大村健二さんの解説により、バッハ時代の演奏について思いを馳せたあと、《マタイ受難曲》の冒頭と終結の大合唱を挟んで、福音書部分は、団員がそれぞれの配役に応じて朗読し、全 15 曲のコラールは、合唱団による演奏に続いて、聴衆全員によっても繰り返して歌われました。この演奏会が聴衆にも大変感動を与え、2013 年 2 月 24 日(日)、カトリック百合ヶ丘教会(川崎市麻生区)にて、同じスタイルで演奏されることになりました。

④ 創立 50 周年記念懇親会

7 月 8 日(日) 14:00、アルカディア市ヶ谷。講演：笠原芳光氏(宗教学者)。演題：「逆説とは、なにか? — 宗教より宗教的なもの」。太宰治の「櫻桃」を取り上げて、宗教を超えた「宗教的なもの」を明快に語られ、バッハの音楽にも通じるものを示されました。会場では、出席者全員に『バッハ宗教歌曲集名演 20 選』(次項⑤)が記念品として贈られました。60 名出席の盛大な懇親会でした。

⑤ CD/楽譜『バッハ宗教歌曲集[日本語演奏]名演 20 選』発行

1996 年の『J.S.バッハ宗教歌曲集』(大村恵美子訳詞、丸善プラネット制作)刊行を機に、定期演奏会のアンコールとして、独唱者のおひとりに上記曲集から 1 曲選んで歌っていただくこととしましたが、それを歌詞(日本語/ドイツ語)つきの楽譜も添えてまとめたのが、11 名のソリストによるこの夢の饗演です。同じ曲でも、複数のソリストで歌われているものもあり、曲の解釈、音楽性等実に勉強になります。

⑥ 野尻湖での合宿とコンサート

8 月 4 日(土) 16:00、野尻湖神山教会。2 日～5 日に合宿。「真夏のクリスマス」の標題でカンタータ 111 番と《クリスマス・オラトリオ》前半からの抜粋、およびピアノ独奏でグリーグの組曲《ホルベアの時代から》を上演。《クリスマス・オラトリオ》では、ルター・コラール(第 17 曲と 23 曲)を、ドイツの聴衆は原詞、

欧米人は英訳歌詞、日本人は日本語で一緒に歌いました。内山亜希さんのピアノ演奏は、聴衆の心を一心に引きつけるもので、表現力豊かなものでした。演奏会全体の終了後に、客席からブラボー！の声。今まで39回野尻湖で演奏して、初めての感動の声でした。

⑦ 第107回定期演奏会（50周年記念企画Ⅱ）

11月9日（金）19:00、杉並公会堂。《クリスマス・オラトリオ》前半とカンタータ71番。大村恵美子指揮、(S) 光野孝子、(A) 佐々木まり子、(T) 鏡貴之、(B) 新見準平。演奏会に来られた方々の感想でも「美しく、身近にバッハを感じた」「説得力に引き込まれた」「バッハ音楽の普遍のメッセージがリアルに迫ってきた」等、好評を博した演奏会でした。

⑧ 釧路より新入団員参加

ソプラノの須藤富美さんが、2013年の《マタイ受難曲》全曲演奏会に参加したいとのことで、昨年3月に入団され、5月の荻窪教会から、8月の野尻湖、11月の定期演奏会にも出演されました。釧路から飛行機で練習に参加、その熱意には頭が下がります。北海道では帯広で《ロ短調ミサ曲》に参加されたとのことです。今春の《マタイ受難曲》と一緒に歌えるのは、嬉しい限りです。

⑨ 練習会場、世田谷中央教会より荻窪教会へ

世田谷中央教会での練習は1993年1月9日（土）からでしたので、約20年にわたってお世話になりました。定演の前には、同じ演目で特別演奏会を開かせていただきました。また、グンドルフ・アンメ牧師（当合唱団のドイツ巡演では、第1回より受け入れ側の代表を務められた）が来日されたさいには講演をお願いし、あわせて、来日直前に亡くなられたご子息を追悼して、カンタータ106番（「哀悼行事」）を中心とする記念演奏をさせていただきました。

9月より、小海先生のご好意により、土曜日の練習場を荻窪教会に変更することとなりました。荻窪を「日本のライブツィヒ」にしようと夢見ておられる牧師さんの教会です。そのような教会が練習場として与えられ、心より感謝いたします。

⑩ クリスマス懇親会

12月17日（月）18:30、目白聖公会。バスの千葉さん、白井さんらのお世話で、34名（うち、お客様4名）が参加され、久保庭(B)さんのゆったりした温かな司会で、なごやかなうちに会は進められていきました。手料理のご提供、バザーへの献品等ご協力のみなさまありがとうございました。お客様からは、バッハの音楽を日本語で歌う意義が話されました。その後、ミニ・コンサートが開かれ、本田さん(B)のギター伴奏によるOh Come All Ye Faithful、川合さん(S)のO Holy Night、久保庭さんの中田喜直作曲「ゆく春」、加藤(B)の讃美歌第二編136番「われ聞けり かしこには」（原曲はロシア民謡）がそれぞれ独唱で歌われ、またフルート風岡和子さん(A)と白井さん(B)、チェロ岡山さん（お客

様）、ピアノ内山亜希さん、の伴奏によるカンタータ71番のNo.4アリアを、団員バスのメンバーで演奏し、全員で松尾さん(B)編曲による「荒野の果てに」を歌いました。大村先生からは、東日本大震災を覚えてのメッセージ、創立50周年の4大合唱曲企画が終わったら、またぜひカンタータを演奏したい旨のスピーチが語られ、最後に皆でWe wish a Merry Christmasを合唱し、充実した1年の締めくくりをいたしました。

⑪ 荻窪教会クリスマス・コンサート

12月25日（火）19:00、荻窪教会。《クリスマス・オラトリオ》前半。フルート山田恵美子、チェロ船田裕子、オルガン金澤亜希子。この演奏会で画期的なことは、合唱部分のみならず、レチタティーヴォやアリアもすべて合唱団員の演奏で実施したことでした。独唱部分をパート全体であるいはパートの小編成で取組んだのでした。

大村先生よりこの提案がありましたとき、ほとんどの団員はそんな無理なことをと思ったことでしょう。特に、第15曲のテノール・アリア、29曲のソプラノとバスの二重唱は超難関で、当初、聴いていただくには程遠いものでした。しかし、毎週の通常練習の前後に特別練習を積み重ねるうちに、遙か遠い先にあった曲が少しずつ、もしかしたら努力次第で、少しは形を成したものになっていくのではないかと思えるようになってきました。まる2カ月の猛特訓、フルート、チェロ、オルガンの助けもあり、25日当日には思いをはるかに超えた美しい演奏に仕上がりました。特にアルトのアリアは、一人で歌うのとはまた違って、パートがひとつになった時の帯のような連帯感と、声量と訴えてくる美しさを感じました。15曲のアリアをテノールが見事に歌い終えたとき、万感の拍手を心一杯、胸のうちでたたきました。

山田恵美子さんのフルートは深く、やわらかな音色で、この暗い世を暖かい、希望のある世に変えてくれる音楽を創りあげていました。船田裕子さんのチェロは、このオラトリオ全体を充実感のある、秩序だったものに仕上げていました。金澤亜希子さんのオルガンは、響きのある会堂で、やさしい、輝かしいオラトリオに創りあげていました。合唱は、大村先生が練習で何度も言われた「“みどりご”のイエスの誕生を歌うのだから、やさしく、明るく、素朴に、やわらかく、美しく」を心がけて歌いました。一生涯で《クリスマス・オラトリオ》のレチタティーヴォやアリアを歌うことができる機会は、まずないでしょう。このような体験を与えてくださった大胆な大村先生の決断に感謝しております。

2012年は、まさに東京バッハ合唱団創立50周年を祝うにふさわしい、画期的な充実した一年でした。



第 107 回定期演奏会を聴いて

是則 和子 (ご来聴者)

クリスマス・オラトリオの演奏会、感動を与えてくださってありがとうございました。バッハの素晴らしい曲ということはもちろん感動の元ですが、ふだんから存じ上げている方がステージに居られてのコンサートの感動は、なにか自分もそこにいるような強い胸の高鳴りを覚え、嬉しいものです。

主宰者の大村様はホームページを通して前もって想像しておりましたが、考えていた以上の驚きでした。エネルギーでそれだけで滑らかで、素晴らしい指揮でした。ソロの方々もすばらしく、コーラスも練習を重ねられた結果はさすがと思いました。

日本語演奏に関しては、文語文がはじめは少し難しく感じましたが、幸いプリントがあったのですぐに慣れました。特に全体が祈りである宗教曲は、歌いながら、聴きながら、演奏者と聴衆が作曲者とともに祈っているわけですから、意味がわかることがとても重要なので素晴らしいと感じました。

この時期に感動のコンサートを本当にありがとうございました。お蔭様で、クリスマスを迎える宗教的気分になりました。お礼申し上げます。

.....

【団員・岡村隆】是則様は地元の趣味のサークルで一緒にさせていただいております。大村先生と同世代で海外生活が長かった方です。バッハの宗教音楽をこよなく愛しておられることを存じ上げていましたので、今回お誘いしました。

合唱団のクリスマス懇親会

堀 甲子 (後援会員)

お送りいただいた「月報」に、12月17日の目白聖公会での懇親会の予告が出ていました。去年はじめて参加させていただき楽しかったものですから、今年もぜひと思い、団員の三上裕子さんとおして出席の申し込みをさせていただきました。

当日、定刻より少し早めに到着したところ、チェロやフルートの合奏のリハーサルをなさっていらして、楽しい雰囲気वादただよっていました。また中央のテーブルには、もう御馳走が並んでいました。私はバザーのために少し持参したものを差し上げました。三上さんは、すでに私のために席を確保してくださり、同じ武蔵野教員であり、聖学院大学の松原望教授を紹介くださいました。同じ学校法人につながる方がいらっしゃることを知り、心強く感じました。

定刻となり、司会の方が、まずご挨拶をと松原教授をご指名になり、つづいて私が指名され、女子聖学院中学高校に在職したことなどを申し上げました。

男性の方の独唱、ソプラノ独唱、ギター独奏、チェロ・フルートと男声コーラスの合奏など、さすがバッハ合唱団！と、感銘ふかく聴き入りました。ついで合唱団 11 大ニュースの発表があり、最後に大村恵美子先生の 50 年の思い出、そして、まだ御馳走が残っているから、食べつくし、語りつくしてと、創立 50 年の最後の年を締めくくる感銘深いお話しで幕を閉じました。

バッハ合唱団が今年 50 周年を迎えられたという輝かしい歴史を刻まれたことは、素晴らしいことですが、その間、きっと様々な困難があったことと思います。それを乗り越えて今日まで続けていらしたことは、主宰者大村先生のご熱心・ご努力のみならず、支える方々、合唱団のメンバー方、とくに私の向かい側にすわっていらした女性の方々のお顔を拝見しながら、みなさんのご努力をつくづく思ったことでした。

こんど演奏会にうかがったとき、舞台の上の方々のお顔を、あのとき前にすわっていらした方々だなあと、思って拝見できるかなど思っていました。

ほんとうに楽しい時を過ごさせていただいたことを感謝しつつ、合唱団がいっそう輝かしいご発展をなさるようお祈りしつつ、家路につきました。



■ 合奏風景 (カンタータ 71 番より「昼も夜も」。岡村氏撮影)

将来のドイツ巡演に希望

イルゼ・キーゼヴェッター

(毎回、現地で同行してくださった友人)

Liebe Emiko, lieber Kenji,
heute habe ich mit großer Freude Ihre Post erhalten. Leider versäumte ich, auch Ihnen Alles Gute zum Weihnachtsfest und für das Neue Jahr zu wünschen. Das möchte ich hiermit vielfach nachholen. Auch unsere herzlichen Glückwünsche zum Jubiläum Ihres Chores.

Die Anerkennung des Deutschen Botschafters zeugt von Ihrer hervorragenden Arbeit mit dem Chor. Ich hoffe nun, dass dadurch eine neue Möglichkeit für eine weitere Tournee in Deutschland gegeben ist.

Vorrausgesetzt, dass wir gesund bleiben, das wünsche ich Ihnen vom ganzem Herzen. Ich habe mich nach meiner Herzoperation gut erholt. Auch meinen Kindern geht es gut. Susi heiratet im nächsten Jahr und Robert hat sein Studium abgeschlossen. Er wohnt und arbeitet jetzt in Berlin.

In der Hoffnung von Ihnen zu hören grüßen vielfach Ihre Ilse nebst Kindern und Enkeln

2012年12月31日

今日、あなた方からのお便りをいただいて大喜びです。こちらからクリスマスと新年のごあいさつをお出しするのが遅れて、ごめんなさい。いまここに、それを申しあげ、あわせて合唱団の創立50周年をこころよりお祝いいたします。

ドイツ大使館のメッセージは、あなた方の合唱団の業績を讃え、証しています。私はそこで、また将来のドイツ巡演が実現できるようにと、希望しています。

今のところ、私は健康です。あなた方も元気でいらっしやるようにと願っています。心臓手術後の回復も順調です。子どもたちも元気です。ブージは来年[今年]結婚、ロバート[2人ともイルゼの孫]は研究生活を終え、ベルリンに住んで勤務しています。

あなた方からの、またのお便りを期待しつつ
イルゼと子どもたちと親戚より

団員・柿沼徳子様とのお別れ

大村 恵美子 (主宰者)

1月2日の早暁に徳子さん永眠、4日午後には葬送式とのお電話をいただき、団員の方々にも連絡をとり、急5きょ、埼玉新生教会の式に参列させていただきました。ほかに荒井、小口、高野、三上、大村健二、加藤、松尾、白井均らが出席しました。

いつも静かにほほ笑んでいらした徳子さんは、ついひと半月ほど前に、こんな気丈なメールを書いてくださったのでした。

2012/11/20 (火) 21:22

大村恵美子先生、健二様

ご無沙汰しております。この度は、大変ご迷惑、ご心配をおかけし、また、素敵なお見舞いカードやご本を頂いて恐縮でございます。

11月9日の定演は、大成功だった由でおめでとうございます。その間、私は一ヶ月、入院、治療の日々を過ごしました。

長らく癌の転移・治療を繰り返しておりましたが、とうとうそれが脳に転移し、しかもご丁寧に小脳と大脳の両方に転移していました。(…略…)これで治療は終わり。あとは頭が腫れたり、むくんだりするのに注意していくというものです。それで退院して家で過ごす方が気分転換になるでしょう、リハビリにもなるし……と。

今、左手指に麻痺があり、力が出ません。軽いものでも、すぐ落としてしまいます。振り返れば、以前から楽譜を持つのに不便していました。今も左手は使わずにメールをしています。

脳をいじっているためか、どうも食後にのむ (ア)

【次回公演ご案内】

創立50周年記念「バッハ4大合唱作品[日本語]連続演奏」[3]
第108回定期演奏会

《マタイ受難曲》

日時 ■ 2013年3月30日(土)、14:00開演

(開場13:00、終了予定17:30)

会場 ■ 紀尾井ホール

(四谷/赤坂見附 Tel.03-5276-4500)

鏡 貴之 (エヴァンゲリスト/テノール) 渡邊 明 (イエス/バス)
光野孝子 (ソプラノ) 佐々木まり子 (アルト)
鳥海 寮 (テノール) 藪西正道* (バリトン)
草間美也子 (オルガン) 東京カンタータ室内管弦楽団 (管弦楽)
東京バッハ合唱団 (合唱)
東京バッハ児童合唱団 (ソプラノ/ピエーノ)
大村恵美子 (指揮/訳詞)

■ チケット(前売り)発売中: 4500円(全席自由)

お申し込み(合唱団事務局)

電話: 03-3290-5731、FAX: 03-3290-5732

メール: bachchortokyo@aol.com

ホームページから: <http://bachchor-tokyo.jp/>

または、チケットぴあ

電話: 0570-02-9999 (Pコード186-038)

昨年11月のチケット発売以来、お蔭さまで売れ行き好調です。お早めにご入手頂けますよう、ご案内申し上げます。

● 出演者変更のお知らせ ●

※ バス・アリア等で出演予定だった小松英典氏(バリトン)は、事情により藪西正道氏と交替いたします。ご了承ください。

藪西正道 (やぶにし・まさみち、バリトン)



東京芸術大学卒業、同大学院修士課程修了。イタリアに留学。テルニ国際声楽コンクール優勝。フィレンツェ歌劇場新人オーディション第2位。「ドン・ジョヴァンニ」のタイトルロールはじめ、レパートリーは50役を超える。「第九」「メサイヤ」「レクイエム(フォーレ)」「天地創造」「テレジア・ミサ」「戴冠ミサ」などの独唱者として、宗教曲公演にも数多く出演している。

(ア) 薬を選ぶのも覚束なくて、情けないことです。頂いた折角のご本を開くのも、しばらく先になるかも知れません。悪しからずお許しください。

そんなわけで合唱の練習に通うのはここまで、と決断しました。長い間お世話になり、楽しませて頂き、本当にありがとうございました。これからは後援会員としてかかわらせていただきたいと思います。そして体調が良かったら、一度、二度、聴衆として参加できたら嬉しいな! と思っております。

団員のみなさまともあまり親しくお話できずに、

練習後すぐに帰宅してしまいました。どうぞくれぐれもよろしくお伝えくださいませ。

柿沼徳子

お妹さんの関根佐智子さんを通じて、暮れまで平常と変わらない治療生活の日々だと知らされていた私たちは、来たる3月30日の《マタイ》定演の客席で、応援の拍手を送る徳子さんのお姿をつよく期待していたのですが、晴れあがった正月2日に、もうみもとへと旅立ってしまわれました。広い礼拝堂一杯の参列者、そして故人のご遺志という、簡素で心のこもった式次第と進行。しばらく葬儀への出席から遠ざかっていた私たちには、将来の模範的な経験となりました。

じつは、去年7月8日の50周年記念品として制作したCD/Book『バッハ宗教歌曲集・名演20選』の最終曲の選曲は、徳子さんのかつての感想文の思い出からなったものでした。

第87回定期のアンコールに歌ったコラール〈ながみ前に出で〉BWV 668 (BWV 432) を、ある日ふと思い出して、録音を聴きながら、涙がとまらなくなった、という徳子さんの文章の記憶から、この歌曲集のしめくりに、あえてソロではなく、合唱のコラールを配置したのでした。

私も、いつ地上から旅立ってもよい年齢なので、「わざわざ、なまの演奏をわずらわさないでも、このCDの終わりの3曲、〈死よ来よ 憩いよ〉BWV 485 から〈ながみ前に出で〉までを掛けていただければ、ぴったりです」と、冗談半分、言っていました。それが、当の徳子さんの葬送に実現するとは一。

よいお仲間にも恵まれたご生涯、われわれ合唱団の仲間も、正月早々に、10人も顔を合わせ、徳子さんの、花に蔽われた安らかなお顔ともごあいさつし、電車の中から、赤々とくっきりシルエットを現わしている、ダイヤモンド富士といってもいいほどの夕景を堪能しながら、人生の成就と永遠の希望にひたされて帰途につきました。

何度も式中にくり返された「徳子さん、ありがとう」を私たちもくり返しました。

新刊案内

樋口隆一著

『バッハの人生とカンタータ』

大村 恵美子

また、バッハに関する樋口氏の著作が1冊ふえた。研究書、入門書ともに数冊出版しておられる著者が、こんどは3.11の大震災を体験して、あとがきにも記されたとおり、「私自身の人生と音楽とのかかわりを問い直す意味もあった」という、深い感慨のもとに書かれたものである。

1960年に渡欧留学した私と、1974年に留学された樋口氏とは、経歴の深さ広さこそちがえ、学生時代から一貫してJ.S. バッハの音楽のわが国への普及をこころざし、演奏をつづけてきたことにおいては共通する多くの点をもっている。私たちの合唱団の過去5回の渡欧演奏旅行の最初(1983年)、巡演プログラムと同じ内容で東京での定期演奏会をしたとき、打ち上げに樋口氏も残られて、「この内容だったら、ドイツの人たちも喜ぶますよ」と、わがことのように昂奮して励ましてくださった、そのオープンな友情を、私はいまだに思い出して感謝している。

バッハの音楽自体、またその研究や解釈など、なんでも最高級で、取りつく島もないくらいむづかしい。キリスト教国の住人でないものには複雑すぎる、あまりにも理知的で、聴覚だけではついてゆけない世界…etc.と、この国では敬遠されることが多い。それを、なるべくわれわれの土着の文化に根づかせようと、母語演奏を通してきた私の立場と、それこそ最高峰のレベルをめざして、「新バッハ全集」の編集にたずさわられ、またご自身の演奏で、世界でも珍しい作品の紹介にも挑まれる樋口氏の立場とでは、それぞれの流儀には隔たりがあるかも知れない。それでも、それぞれが果たしたバッハ音楽普及への貢献は、決して小さくはなかったと認められている。

私の15年あとから(出生)、たくましい足取りで疾走してこられた樋口氏が、3.11後、深いご自身の心をさらけ出して、入門段階にある新しいバッハ体験者に、1曲ごとのご解説を、そのときどきのご自分の思い出から紡ぎだすようにして鏝めていらっしゃる。それにつられて、私も、ほぼ同時代的に、東西分断のドイツ、奇跡的にその壁が崩壊し、息もつかせず統一して、ヨーロッパの中心に、こんどはモラル的にも、経済的にも指導的な存在として、いち早くよみがえってきた新ドイツを、樋口氏と同じように、日本からみつめつけてきた。

悪魔にさらされた一時期の自分史を、絶対に再現させないよにとの鉄の意志で団結している、かつての「枢軸」友国を深く見習って、私たちも、ふらふらせず、小さいながらも世界中に高い信望を勝ち得る、芯の強い人間の故国を打ち立てねばならない。その指標を、バッハの音楽に期してゆきたいものである。やさしい面持ちのこの新刊が、逆にそのような強さを、読む者に示唆してくださった。歳を重ねることは、ありがたいものである。(春秋社、2012年11月刊)

